

## 令和7年度 第2回 学校運営協議会

1 日 時 令和7年10月28日(火)午後1時30分から3時まで

2 会 場 藤枝特別支援学校焼津分校 相談室

3 参加者

(1) 学校運営協議会委員

委員A、委員B、委員C 3人

(2) 本校職員

校長、教頭、事務長、部主事、教務主任 5人

4 会議次第

(1) 開会／校長挨拶

(2) 校内参観

(3) 協議

(4) 校長挨拶／閉会

5 会議内容

(1) 開会

ア 校長挨拶

- ・今学期は、津波警報発令や台風15号の影響で休校や下校が遅れるといった事態が発生。想定以上のことが起こったため、判断を早くしていく必要性を感じた。
- ・焼津中央高校と行った海岸清掃のギネス挑戦では、目標1,500人に対し1,620人が参加し達成。PTA作業と合わせて海岸清掃を2回実施し、地域の方も多く参加してくれた。
- ・後期の学習では、焼津水産高校併設の分校ならではの活動（実習船への乗船、燻製作り、金属加工、エンジン分解）が多く体験できた。これらは生徒たちの仕事にも繋がる活動であると感じている。代表生徒が、総合的な探求の学習の成果を高校の発表会で発表する機会も得た。あれだけの人数を前に発表する機会に恵まれたことは大きな経験となつた。
- ・課題として、藤枝特支の分校が水産高校の中にあるということを知らない地域の方がまだ多くいるため、地域との繋がりを深めていく必要があると感じている。

(2) 校内参観

- ・チェックリストをもとに、校内を参観。

(3) 協議

ア 学校経営に対する取り組み報告

(ア) 評価の概要説明

- ・評価は安全・安心、授業、連携の3点であり、AからDで評価し、平均点と達成度で判断している。前期は、AとBの評価が大半を占めており、教職員は概ねポジティブに教育活動を進めていると自己評価している。ただし、後期に向けて改善すべき点も出ている。

(イ) 取組の柱：安全・安心

- ・今年度、災害対応（浸水、南海トラフ、津波警報）が多くあり、初めて垂直避難も実施した。教員間では緊急時の体制の理解は進んでいるが、突発的な事態に備え、今後シミュレーションや訓練を重ね、それぞれの動きの理解を深める必要がある。
- ・生徒関連の課題として、登下校中の対応や、災害時の引き渡し、個別の安否確認の方法を具体的に充実させる必要がある。

(ウ) 取組の柱：授業

- ・昨年度は教員の自己評価が低かったが、今期は「分かった、できた」を実感できる授業作りが進み、学びの振り返りや目標提示の工夫が定着した。
- ・ICT の活用が広がり教材共有が進んだ。生徒は修学旅行用のアンケートを Google Forms で作成したり、デジタルしおりを作成したりしている。
- ・キャリア面談（教員と生徒の対話を通じた目標確認）の効果を、生徒も保護者も実感している。後期は学びの質的な向上を目指す。

(エ) 取組の柱：連携

- ・生徒の困り事を早期に把握し、教員や関係機関との連携を通じて対応ができている。
- ・焼津分校は良い場所にあるため、地域と繋がった特色ある取組が可能。しかし、カツオプレートは昔から分校で切っているが、地域での認知度が低いなど課題がある。
- ・発信については、もっと積極的に強化すべきであり、外部の知恵を借りたい。
- ・キャリア教育の面では、「なりたい自分」を意識して学ぶ生徒が増え、目標を伝えられる生徒も増えた。言葉にすることが難しい生徒もいるため表現方法の育成が課題である。後期は目標の意味付けを共有し、将来像を明確に描けるよう支援を強化したい。

イ 前回の学校運営協議会での意見に関する取り組み報告

(ア) 安全・安心の環境整備

- ・防犯カメラの設置は予算検討中・要求中である。
- ・夏の熱中症対策として、遮熱順化を意識した対応を徹底した。冷房の適切な活用やこまめな休憩を実施し、大きな不調者なく乗り切った。
- ・災害対策として、夏休み中の津波警報（伊豆半島関連）や9月の台風対応を踏まえ、今後災害対策本部による図上訓練を予定している。危機管理マニュアルの隨時見直しを行う。

(イ) 授業の充実

- ・学びを深めるため、2年生の環境学習で神戸大学の先生と授業を予定している。
- ・静岡福祉大学と共同できる形を今後検討していく。
- ・ICT 活用では職員研修を実施し、生成 AI の利用やタブレットの増設を進めた。生徒全員が同時に授業でタブレット活用できる状況になりつつある。

(エ) 地域連携の強化

- ・集中作業の委託作業として、近隣事業所からギフト商品の箱折り作業を請け負った。担当者に学校に来校してもらい、実演指導を受けた。
- ・生徒が作業の背景や目的を理解して取り組むことを大切にしている。

(オ) 学校経営計画の見直し

- ・来年度の学校経営計画策定に向けて、現在はパーセンテージ評価となっている成果目標について形成的評価（100%達成目標の見直し）を検討していく。

ウ 報告事項に関する質疑応答・意見交換（・質問、意見 →回答）

- ・神戸大学の佐賀先生（生物系）とは、どういう経緯で繋がったのか？

→焼津中央高校と環境DNAの取り組みで3年ほど前から繋がっている。分校では、焼津中央高校が研究材料にしている海のごみを、サービス班の作業で分解・整理している。昨年度分校の地域活動部が焼津中央高校と共同で環境DNAのサンプル採取に参加した。神戸大との連携により、知的障害のある生徒も科学的な調査（DNA分析）に貢献できるという論文も書かれている。

- ・委員から、こういったアカデミックなことに触れる機会を大事にしてほしいという意見があつた。

- ・先日の大雨の対応も含めて、災害対応として現在どのような状況なのか。

→先日は、休校の条件に当てはまらない中、予想以上に水が増え、電車が止まるなど、災害が広がり想定外のことが起こった。学校周辺が冠水し、保護者がお迎えに来られる状況ではなく、引き渡し場所として想定できる場所もなかった（水高敷地も冠水）。学校周辺は津波浸水区域。浸水区域から外れる安全な引き渡し場所の検討が必要。生徒全員の引き渡し場所はないため、事前に何か所か、駐車場利用の協力を得るなど、引き渡し場所とタイミングを考える必要がある。

- ・会社では組織関係が紙からデジタルに移行している。生徒が働き出す際に困らないよう学校でのデジタル活用教育は重要。Google Forms を使える生徒がいる点は心強い。

→課題として、全員ができるわけではない。また、機能として操作はできても、物事の読み取りや、自分の意思を明確に表明する力（表現力）を養うという面での課題もある。

## エ 学校運営に関する協議「地域との協働と取組の発信」

### (ア) 地域との協働活動の現状報告

- ・自主生産作業では、木工班が 焼津駅前商店街の芸術イベント「カツオ Show 展」に魚型の木製板を納品し、アート作品として展示されるユニークな取組を実施。縫製班では、名物の魚河岸布を使った普段使いできる製品を開発し、地元店で市場調査を実施。農園班は、季節の野菜や花を栽培・地域の飲食店、水産高校に販売。入学式に小学校へ花のプランターを届けた。委員の協力で稻作体験も実施している。サービス班は、地域のお茶屋店主や喫茶店のオーナーから日本茶、珈琲の入れ方などを学び、老人施設のももいろカフェで提供。地域交流センターの清掃も行っている。
- ・地域作業学習では、近隣 12 の事業所に協力いただき、週 1 回、実際の職場で仕事体験（清掃、調理、商品整理、チラシ折り込みなど）をしている。
- ・部活動では、音楽部が地元イベントでダンスを披露。焼津中央高校と共同で海岸清掃を行い、ギネス達成。環境 DNA 学習、平和学習を実施。
- ・水産高校との交流では、実習船乗船体験、エンジン分解、サバの燻製作り、金属加工など水産高校の専門的な学びを体験しながら交流を実施。今年度乗船体験で、分校生徒がお礼の手紙を送ったところ、遠洋航海中の水高生徒から返事が来るという新たな交流があった。
- ・専門家による指導では、印章店主による篆刻指導、空手（全日本静岡県空手連盟）、ゴルフ（ゴルフ場協会）でのプロ指導などの機会に恵まれている。
- ・地域貢献として、地域のお寺で大晦日の参拝客に配布される絵馬制作に携わっている。

### (イ) 協議①地域との協働をさらに深めるために

- ・一流のプロや研究者（神戸大先生、空手連盟）から指導を受ける機会は、障害があるからといって排除されない、同じチャンスを与えることが重要であり、ぜひ発信すべき。
- ・作業製品の売上は生徒の意欲につながる。どのように生徒に還元し、達成感や活動への意欲に繋げているか。

→材料費は県費で購入しており、売上は全て県に戻る。生徒は売れた喜びや達成感は得るが、収益を次の活動の資金にすることはできない。製品は寄付された廃材なども使

うため、市場価格の半額程度で販売している。学校の目的は、商業的な利益ではなく、生徒の成長（技能、態度、喜び）を得ることである。外部からは「経済のリアルを教えるべき」との意見もあるが、学校側は「あくまで成長のため」と説明している。

（ウ）協議②効果的な発信方法についてのアイデア

1) 分校から経緯や現状の説明

- ・この夏、志太榛原地域の高校紹介パンフレット（藤枝ガールズミーティングと藤枝MYFCのコラボ企画）に、分校が当初掲載されていなかった。発信不足・認知度の低さを痛感する出来事だった。生徒が地域でより良く生活するために、分校の良さを知つてもらうことが必要と考えている。ホームページは細かく載せていないため、広報の機会が少ない。現在、校内でInstagramを開始するためのルール作りを始めたところである。ホームページの更新は教員が行っている。
- ・現在、校名は知っているが、どんな活動をしているか全体像を知らないという状況。
- ・富士東分校はInstagramの活用が先進的である。生徒が今時の凝った動画（文字がキラキラ、音楽付き）を作成し、教員が投稿する運用をしている。

2) 委員の方からの意見

- ・会社内でも分校の活動（職場実習の協力企業12社など）が全く知られていない。もっと広げたら協力したいという声が出る可能性がある。
- ・生徒自身が関わるSNSチームを校内に作る。ネタはたくさんあるのではないか。自社では、Instagram、Facebook、X（Twitter）を毎日更新しており、1～2ヶ月先まで投稿計画（写真、文章）を作成し、チームで交代で担当している。
- ・Facebookは年齢層が高く、インスタグラム、X、TikTokが若い層（生徒、母親）に届く。Instagramは写真や動画が映える点で効果的である。
- ・Instagramは一度見てもらえると、次もまた関連コンテンツが表示されるため、認知拡大に効果がある。ハッシュタグの活用が重要である。
- ・SNS運用の課題として、PTAや保護者から顔出しの許可を得る必要がある。当面は手元のみの撮影など、配慮が必要。

9. 閉会

（ア）校長よりお礼の言葉

- ・本日の協議で得られた意見の中で、防災については、検討すればするほど課題が出てくるが、有事の際に備え、検討を進めていく。地域との連携を深める取組と、それをどう発信していくかについては、頂いた意見を基に、まずはInstagramをスタートできるよう一歩ずつ進めていきたい。今日の協議内容を後期の学校経営に活かし、生徒が地域の中で生活しやすくなるよう学習活動を充実させていきたい。